

## 「ベートーヴェンの「第九」を楽しむために、知っておこう！！」

### ～西洋音楽の金字塔、ベートーヴェンの「第九」ってどんな曲？～

#### 1. まず、ベートーヴェンについて知ろう！

- ①ベートーヴェンは1770年にドイツのボン市で生まれ、1827年にオーストリアのウィーンで57歳の生涯を閉じた、古典派からロマン派へ移行する時代に活躍した作曲家である。
- ②フランスの音楽作家、文学者、ロマン・ロラン(1866～1944)が、「ベートーヴェンの生涯は、嵐の一日に似ている」と表現したように、苦難との戦いの一生であった。
- ③26歳ごろから始まった聴覚の疾患は、日常的な耳鳴りや高音が聴こえにくくなるという音楽家にとって致命的な現象が現れ、1802年(32歳)についに自殺を決意し、弟たちに宛てて通称「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれる手紙を書く。
- ④音楽が持つ普遍的な力は、ベートーヴェンを立ち直らせ、鬼神のごとく創作にのめりこんだ。それまでの社会的交流から身を引き、自然を愛する生活へと変身した。
- ⑤オネーゲルというフランスの作曲家は、「ベートーヴェンが耳が聴こえなかったことが彼を内面的に成熟させ、その天才の集中を助け、時代の無味乾燥や煩悩さから彼を解放した」と述べたとされている。  
ベートーヴェンは、耳疾に悩まされ、ついには全聾となってしまったが、そのことが、「第九」のような傑作を排出した原動力となったといえる。

#### 2. 「第九」が作曲されるまでの過程を知ろう！

- ①フリードリヒ・シラーの詩「歓喜に寄す」は、1785年に創作された。
- ②ベートーヴェンは、この「歓喜に寄す」の詩に1792年(22歳)に出会ってから、この詩をもとに作曲の意図を示していた。その歳月は実に32年間に及ぶ。
- ③1795年に、ベートーヴェンは、「相愛」という歌曲を作曲する。この歌曲の旋律が第4楽章の「歓喜のメロディー」と類似している。この旋律は、フランス革命前にフランスで流行していた旋律であった。
- ④1808年(35歳)に、管弦楽曲「合唱幻想曲」を作曲し、終楽章で合唱を用いる。この中で「相愛」の旋律が使われ、「第九」の「歓喜のメロディー」につながっていく。
- ⑤1812年にベートーヴェンがスケッチブックに記した「二短調の交響曲」という予言的な言葉がある。この着想は、1817年になってようやく第1楽章の下地となる楽想となって現れる。

#### 3. 「第九」の名楽章と特徴をつかもう！

- ①「第九」は三つの大きな特徴を持っている。その一つは、交響曲に、合唱を用いたこと。二つ目は、第2楽章をスケルツォ楽章、第3楽章を緩やかで静かなアダージョ楽章としたこと。三つ目は、全体の規模が大きく、全曲を通すと1時間を超えるほど長大で、劇的表現が強いことであるが、これらの画期的な試みは、当時としてはいずれも冒険的なものであった。
- ②第1楽章について、ワーグナーが「この暗い、喜びのない気分は、巨人的な大きさのものまで成長し、一切を包みつつ、恐ろしく崇高な荘厳さのうちに、この現世を、それも神が喜びのためにこそ作り給うこの現世を占拠してしまうように見える。」と述べたと伝えられている。それは、宇宙的なスケールの大きさを

感じさせる冒頭部で代表される。

- ③第2楽章は、狂乱と快楽の楽章である。ワーグナーは、「あたかも絶望に追い立てられ、絶望を逃れ、絶え間なく、休みのない努力のうちに新たなる道の幸福をつかまんとするかのようである」と述べている。  
複合三部形式の中間部のトリオの部分は、木管群によって流れるように奏され、官能的な響きををも備えている。
- ④第3楽章は、変奏形式で構成され、嵐の前の静けさのように、愛情に満ちた気高い崇高な楽章は、ベートーヴェンのなかでも類を見ない。
- ⑤第4楽章は、のちに大きな影響を与えた前の3楽章が回想されるという、循環形式のような形式がもちいられ、歓喜の歌の主題が、チェロとコントラバスで現れる。

#### 4. 「第九」の魅力とは？～なぜ日本ではこのように頻りに演奏されるのか？～

- ①「第九」の「歓喜のメロディー」は、誰でもすぐに覚えられ、簡単に歌えてしまうような単純で親しみのある旋律である。(ロマン・ロラン)
- ②5音からできている。(ド、レ、ミ、ファ、ソ)安定を乱す可能性がある第6、7音(ラ、シ)を省いていて、ユニゾンで歌い、等音価で2度進行で上行・下降する。
- ③わずか16小節の中にベートーヴェンの思想の大半が込められている。
- ④「歓喜のメロディー」は、フランス革命の理念である「自由・平等・友愛」すなわち人間の尊厳に繋がっている。ゆえに、これを合唱として大勢で歌うと、勇気と自信が湧き、自分が社会の主人公であり、人間は尊いものだと感じることができる。
- ⑤音楽が持つ力は、歌ったり演奏したりすることによって、その音楽の背景にある精神や思想、あるいは、その音楽が生まれた時の社会の基本概念が、感性的に演奏者や聴衆の中に定着するといわれる。